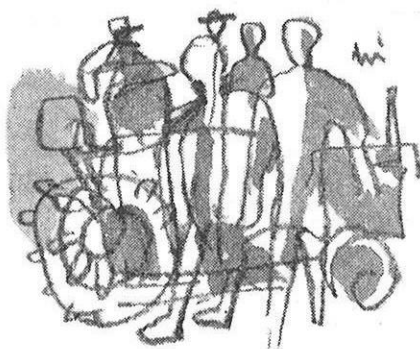


明日を呼ぶ群像



写真は牛深市浅海にて



大地にたつ

若者たち

——闘う浅海の横顔——

永田照喜治

私たちの浅海部落は天草下島の南端、牛深市の東南部にある。高さ二百メートル、二十〜三十度の急傾斜の山が海に迫り、南は海である。

牛深市の近郊蔬菜地帯として、零細農ながら、暮してきた。各農家が動力船を持ち、行きは野菜・薪・鶏卵・果実・甘藷・米・麦等を積み、帰りには日用品や下肥を積んだりした。

昭和二十三年頃から牛深のイワシが不

漁になり、浅海の農業も急速に行き詰ってきた。まだその頃は敗戦後の食糧難時代で、日本の農村の大部分は景気の絶頂であった。しかし、一戸平均水田二十アール、畑四十アールの浅海の農家は、牛深からの現金収入の激減で、行き詰ってしまった。

引揚者、復員者で増大した人口をかかえ、急傾斜地帯の浅海農業は、日本の他の農村より、数年早く曲り角に立たされたわけである。

深海村では昭和二十七年、村の産業振興計画を樹てた。二十代、三十代の青年を選んで、養鶏・ミカン・ボンカン・煙草・ラミー・和牛・蔬菜等の各グループに分け、これに村の予算を重点的に投入した。この試行錯誤を経て、浅海のミカン・ボンカンは残って、部落の町の牛深市の唯一の基幹作物となった。浅海の農家で構造改善事業に批判的な人も、この点では意見が一致している。牛深の不漁により、農業の曲り角に数年早く直面したことを、今になって感謝しているわけである。

世界的な市況の暴落で、ラミーの苗を海に捨てたことも、一等田にボンカンを植えて気狂い扱いにされたことも、前進する私たちに忘れ得ぬ思い出となったのである。

フルハタケ……

フルハタケはどんな奥山にもある。昔

の甘藷は連作がきかず、毎年新しい畑を開いて作っていたそうである。その跡がフルハタケである。

食べるだけに、こんな奥山まで、耕しつくさねばならなかった私たちの先祖。古畑をブルドーザーで開墾する時、私たちが先祖に対し何か良いことをしている気がするのである。

吹雪の夜……

昭和三十八年一月三日。この日天草は吹雪で全線不通だった。「トラクター二号車のオペレーター二名は、今夜大浦港に向け出発。明朝の航送船で熊本に行き整備をすること」私は簡単に指示した。二人の青年は一寸驚いた顔をした。夕闇の中を吹雪をついて、トラクターは出発した。

トラクターには覆いがないので雪に直接吹きさらしだった。今から大きな仕事をしなければならぬ青年だ、これくらい雪なんかには負けずにやろうと、ブラジルに行った仲間の青年たちを思い出した。一時間程たった私の叔父で牛深市の農林課長をしているEがどなりこんできた。

「キサマは人の子と思って、この大雪の晩にトラクターに乗せたりする。すぐ電話をかけて呼び戻すんだ」

私はそれを拒否した。「青年たちがかわいこそ、二人を雪の晩にやります。大きな仕事をやらねばならぬ青年だか

らこそ吹雪の晩に大浦港までやります」

O君の白いアゴ……

青年たちの協業は一経営二十五分を目標にしている。十五分には、一人が二時間灌漑水施肥のできる、自動灌漑施設をつくった。この夏には五百平方畝の共同貯蔵庫ができる。E・E・Cには負けないくらいの経営にしたいのである。

しかし、土地も、金も無い青年たちが二十五分の果樹園をつくるのは困難な仕事である。三カ月ばかり、平均五時間足らずの睡眠しかとれなかった。十日ばかり前、三十才のO君のアゴに、急に白髭が生え出した。驚いて別の青年と交替して貰ったが、彼等は自分の体力の限界ギリギリまで働いているのである。

羊角湾の淡水湖……

総事業費二十八億円で淡水湖を羊角湾につくり、果樹園九百畝を造成し灌漑する事業である。パイロット事業の青年たちは日記寒暖計を使い、液体肥料で省力化したり、羊角湾事業の試験地のつもりで働いている。トラックやトラクターを手足のごとく乗り廻すパイロット事業の青年たちは倅せである。アゴの白髭も吹雪も忘れて働いている。

どうかこの倅せを。もつと多くの天草の若者たちに拡げたいものだ。羊角湾事業に青年たちは素晴らしく大きな希望を燃やしている。(牛深市浅海)